

女教師の素顔は、雨宿りの夜だけのもの

文学系の女教師が、真冬の雨宿りで距離を縮める——越えてはいけない距離が崩れる秘密の高揚

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

彼女は静寂の中で、まるで呼吸一つ間違えると溶けて消えてしまいそうなほどの透明さを放っていた。教室という名ばかりの空間に閉じ込められ、暖房のない真冬の空気だけが肌を刺すような、冷たくて甘美な気配が漂う。窓の外では雪が降り積もり、内側へと溢れ出してくるようだった。そこには社会人向け夜間講座の受講生たちが無骨な声で雑談を交え、彼女を囲んでいるだけだ。しかし、彼女の目線は誰にも届いていない。かといって完全に虚空を見据えているわけではなく、自分の存在さえも忘れ去られたように、只一つの点に焦点を絞っている。

それはある男に向けられていた。遼である。彼だけは着席したまま、あるいは立ち上がってもなお、他の者たちとは一線を画した緊張感を帯びていた。普段なら、こんな寒さの中、薄着のまま過ごすことなど考えられないだろう。だが今夜の二人だけは、周囲の視線や常識的な距離感から解放されたかのような余裕があった。

「……先生」

誰かが小声で呼ぶ。それに応えて振り返った彼女は、少しだけ唇を緩めた。その仕草からは、この密室での時間稼

ぎとして演じているふりをしていることが窺える。実際、講師を務める彼女は常に堂々とした振舞いを強いられているため、今のような微細な揺らぎこそが最も危険であり、かつ惹力を帯びた瞬間だった。

「まあ、雪降り出すなんて」

呟きながら手招きをする。すると遼もまた、周囲の賑やかさを無視して彼女の元に歩み寄る。触れ合う瞬間、そこには冷たい空気の間隙から忍び込んできた湿気に紛れて、彼女独特の香り——古書を扱ってばかりいるような、乾いた紙と混ざり合ったような香りが広がった。それは単なる匂いではなく、彼女の体温だけが溶け出した先にある何かを感じさせるような、官能な予感に満ち溢れていた。

二人は机の隅、あるいは椅子の背もたれのように、身体を預け合いながら言葉を交わす。会話の内容など大したことはなかった。受講生たちの視線を気にしつつも、意図的に間隔を詰めすぎず、しかし距離を離れすぎていない。それゆえに生まれる余白。そこには、普段見せない本音や、隠し持った欲望が蠢き始めているのがわかる。

「寒いね……でも、暖かかったほうが好きだ」

そう呟いて彼女は、自分の頬を彼の手で撫でられ、その温もりが指先から伝わり始めるのを嫌がる様子もさらさらしない。このまま雪が止むこともない夜、二人だけで過ごす

時間がどれほど貴重なのか。周囲にいる者たちはただの背景のような存在になりつつあり、現実世界から切り離されたこの二人の世界だけが鮮明だった。

やがて言葉が足らず、呼吸音が静寂の中で強調されて響くようになる。彼女が振り返るたび、彼の瞳の中で自分が大きく映り込み、まるで鏡に閉じ込められたようになっていく。それは単なる愛欲ではない。何か禁断の果実を食べた後のような、背徳感に満ちた渴望であった。

『――今夜はいつもと違う』

そんな想いが心の奥底で渦巻いていた。いつもの講義での厳格な先生という仮面の下に隠れていた、どこまでも貪欲で繊細な女の本質が、雪の粉が舞う光の中で剥き出しになる。彼女の視線が再び遼へと定まった時、そこにはこれまで見たことのない深淵があった。

「もう、少しだけ……」

そっと囁いた声は、冷たい風を遮り込むように柔らかかった。彼女はゆっくりと頭を下げ、自分の胸元にある何かが弾けるかのように、あるいは心臓が高鳴るたびに鼓動が彼に伝わるかのように、全身を委ねた。その仕草一つで見せるのは、これからの時間が如何に短縮されるのか、そしてどうすれば二人の世界を壊すのかに対する、わずかな戸惑いと期待だ。

夜はまだ更けていくばかりである。暖房機の微かな唸りと、雪が屋根から落ちる音だけが響くこの密室において、彼女はその緊張感を極限まで高めていった。まるで糸に吊り上げられた蝶のように、一瞬でも外れると消え去ってしまうような儚さを持ちながら、しかし確実に誰かを捕らえる準備をしている。

『ただ、もっと近くに来て』

そう願い、指先が彼の服地を捉えた瞬間、触れ合う面積が増え、熱交換が始まり、二人の境界線が溶け始めるのを察知する。それは行為という名の物理的な接触よりも遥かに先立って始まる、五感全てで感知できる前振りの一幕だった。雪夜の真ん中で、二人はこの静寂の中で自分たちの存在意義を見失い、只一つの衝動へと向かっていく。



——ここから先は製品版でお楽しみください——